なかみち・ふうじんどう
中道風迅洞

[朝]な夕なに　[知]る身の秋に
[コ]スモスこおろぎ　[時]雨空
[宇]宙制覇の　[図]太いソ連
[尻]尾をカナダに　[落]す野暮
[め]んと向って　[言]えない恋が
[下]駄で字を書く　[月]の道
[浅]いねむりに　[き]く風の音
[や]はり風かと　[ま]た眠る
[山]の手育ちで　[ま]り子という名
[の]れんかけてる　[手]の白さ

【二十六字詩】

どどいつ入門

古典都々逸から現代どどいつまで

徳間書店

中道風迅洞（なかみち　ふうじんどう）
本名は了丈（さだお）。
大正八（一九一九）年、青森県八戸市に生まれる。
昭和十六年、早稲田大学文学部卒。
NHKテレビ文芸部長、芸能局長など各部局長、同関連団体役員などを歴任。
詩人・エッセイスト。
現代どどいつ教室主宰。詩季同人。
日本エッセイストクラブ会員。
日本サイ科学会顧問。
昭和五十三年以来、NHKラジオ文芸選評「折りこみどどいつ」選者。
著書　ドキュメンタリー『社会探訪』、詩集『帰帆』『流燈会』『風迅洞自選どどいつ集』『風迅洞随筆』など。
現住所　東京都中野区東中野2の23の8
TEL（03）三六六—二〇七〇

二十六字詩
どどいつ入門

初刷　一九八六年一〇月三一日

著者　中道風迅洞
発行人　荒井　修
発行所　㈱徳間書店
東京都港区新橋四—一〇　〒105
電話　〇三—四三三—六二三一
振替　東京四—四四三九二

印刷所　図書印刷㈱
製本所　ナショナル製本

落丁・乱丁本はお取りかえいたします
〔検印廃止〕

©1986 Fujindo Nakamichi Printed in Japan
ISBN4-19-403341-8

209271

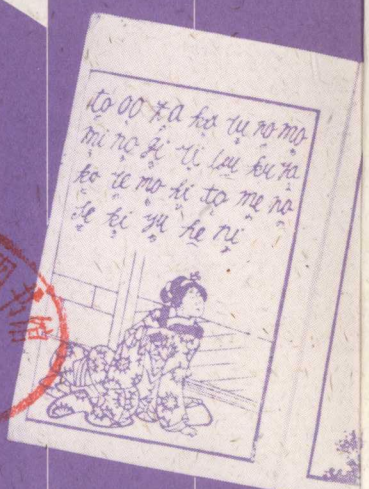
日文 701715336

[カ]レーが匂う　[ど]こかの家で
[町]中稚い　[妻]ばかり
[あ]なただけよに　[の]ぼせた馬鹿へ
[ひ]ろい蛍が　[と]んでくる

【二十六字詩】

どどいつ入門

古典都々逸から現代どどいつまで



大阪府立図書館蔵書

中道風迅洞

徳間書店

埼玉県立久喜図書館蔵書印
185504
埼玉県立図書館
図書館蔵書

はじめに

歌をつくる人を歌人といい、俳句作家を俳人という。私は長年「どどいつ」をつくり、その選者をつとめているが、だれも「ど人」とは言わない。創作二十六字詩（七七七五）、すなわち現代どどいつの作者を端的に言いあらわす言葉がないのである。

平山蘆江（一八八二―一九五三）という粋な文芸の大先達は、どどいつ（都々逸）とか俚謡とかという呼び名を改めて、庶民のまちうたという意味をこめて、これを「街歌」と呼ぼうと唱導された。『街歌』という二十六字詩の歌誌は、昭和六十一年の今日も『街歌・しぐれ』として生き続け、これに拠ってすぐれた今日の歌、いのちの歌を歌う人たちも多い。

しかし、その作家たちを「街人」とか「街歌人」とかは呼ばない。呼ばないどころではない。「街歌」という言葉は、わが国の国語大辞典にも中小辞典にも載っていないのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

フランスの詩人ポール・クローデルが、一九四五年（昭和二十年）、パリのガリマール出版から『DODOITZU』という訳詩集を出したことを知る人は少ない。

同じくフランスの詩人、文学者ジョルジュ・ボノーが著わした『日本の韻律』には、短歌、俳句、現代詩に先んじて、その第一部に「どどいつ――二十六字詩」が語られていることをご存知だろうか。

NHKラジオが、文芸選評の放送に短歌、俳句、川柳と並べて「折りこみどどいつ」を聴取者から募集してすでに八年になるが、応募投句のはがきの表に書いてある「どどいつ係」の表記は、「都々逸」「都々一」「独々逸」「ドド一」等々、人それぞれのあて字である。

なかには「俚謡選評係殿」というのもあったが、これはご年配のわけ知りの人で、むかし『萬朝報』という新聞が「正調の俚謡」を募集するのに「関東にては『ドド一』と云ひ関西にては『ヨシ此』と云ふ、猶ほ各地各様の称呼あるべし」といったぐらいだから、話はますますややこしくなる。

このへんの事情は、「どどいつ」という名の短詩型文芸が負うて来た歴史的宿命として、この本の中でも若干の解説を試みるつもりであるが、要はこれ、本来俗謡として、口に吟じ耳に聴くものであったから、文字などはどうでもよかったのである。

この小著が語ろうとしている「どどいつ」なるものは、その作者に対する社会的な呼称も定まらず、戸籍の名前もあやふやで、いわば氏素性もはっきりしない日かげの花（こういう言葉も古くなった）の伝記を書くに似たむずかしさ、不正確さがあるということ、これがまず第一点である。

私は幼少のころから詩文を友とし、短歌、俳句、どどいつをつくり、自ら詩人のはしくれだと思っているが、歌謡史やどどいつ文献研究の専門家ではない。まして学者ではない。ひょんなご縁で門下生に創作現代どどいつの手ほどきをすることになり、いつしか三十余年、毎月の選評放送でもどんな識者が聞いておられるかもしれないという自らの不安を少しでも消すために、先覚の諸書を読み、古書を集めてその未熟を補っているに過ぎない。したがってこの小著は、もっぱら私の好奇心と自衛勉強のきれはし、あるいは門下初心者へ語った私見の断片である——というようなことを書こうとして、ふとこの道の大先達、湯朝竹山人の『小唄研究』（大正十四年筆）の「緒言」を開いてみたら、

「——なかんづく文献考証の思索に至つては容易ならぬ苦心を要するところだと申します。然るところ私等の俗謡研究の眼目は、ひとへに趣味の鑑賞にあります。（中略）もつぱら文献考証の探索にふける如きは、到底私等の力の及ぶところではなく、また

私等の志ではありませぬ。（中略）研究といふはあたらず、ただ単に他日の備忘に過ぎませぬ。世には趣味風流の歌謡を研究するにあたり、さながら法律学書の検討をなすが如く、学究的研究法も行はれてゐると聞きますけれど、それは私等の学ばんとするところではありませぬ」

と書いてある。

「都々一節文献一斑」という章で、百ページにわたって貴重な都々逸資料の解説をされて、私などこの本のある書棚には足を向けて寝られない教示を受けた大先生が、六十余年のむかし、すでに自らの記述に不備があるだろうことを謙虚にことわっておられるのである。

私ごときがあらためて未熟をことわるなどは蛇足というものであろう。専門学者先生方が相手にされる気づかいもあるまい。

＊

それなら、この本を書くにいたった眼目はどこにあるのか。

その一は、「何かどういつの参考書はありませんか」――それを読めばひととおりのことがわかる本――という多くの人びとの声に答えるためである。もちろん先輩の諸書がないではないが、あるものは簡略に過ぎ、あるものは専門的に過ぎるきらいなしとしない。

その二は、江戸時代の古版本はもとより、昭和に入ってからでも戦前戦後からごく最近までのどどいつ関係（どどいつという呼び名を使わないものも含めて）の刊行物、雑誌のたぐいが手に入りにくく、少数の関係者個人や好事家の私蔵するものをのぞいては、もはや古書展でもその書冊を見ることが困難になりつつある。

私の目にすること、知ることができたものの著冊の名はすべてこの小著の中に記し、その名をとどめておこう。不備や脱落は承知の上で、たとえば昭和十年ごろ、○○県にこういう「どどいつ吟社」のグループがあって、こういう機関誌を発行していた、ということを書いておけば、それが呼び水になってその地方のことに詳しい方のご教示を得られる機会ができようというものである。

かく言う私自身、すでに七十に手が届く年齢になったが、この道の先輩、生きのこりの人たち、みなご高齢となり、叩けどもこだまは返らないことが多い。堀口大学先生にもどどいつの作品があるよと、わざわざ電話をくれた昔の同人誌『掌説』の仲間であった高橋邦太郎さんももういない。非力の私などでも急がなければならないもうひとつの理由がここにある。

その三は私自身の門下初心者や、ラジオを通じて私の選評を聴いてくださる方々への

「手引き書」の役目である。いままでにも、現代どどいつ創作について門下生に示した私の若干の著作はあるが、それらは内輪の私家版であって、どこの本屋の店頭にも見ることはできない。

このささやかな入門書を通じて、どどいつの来し方行く末に興味を持たれた後学の若い方々のためには、私があちこちの古書展や図書館をまわり、先輩に教えを請うてようやくわずかながら知ることができた新旧の先達の著冊の名が多少のお役に立つであろう。

マイクロフィルムによる昔の新聞の調査は、ビューアーを回しつづけて右腕が動かなくなったり、国会図書館の新館移転休みなどで途中で中断してしまったが、もし十年前に、いま私が書いているような本が手に入ったら、どんなに助かったことだろうかと思う。

さてその四は、どどいつの故事来歴はどうでもいいが、面白いどどいつの文句だけを知りたいという向きにも、古今の詞章の出ているところを拾って読んでいただければ、「本音の歌」「未練の詩」としての二十六字詩が、文字どおり今日に生きていることがわかっていただけるように編んだつもりである。

小著の最大の眼目は、その呼び名がどどいつであれ、街歌であれ、俚謡であれ——、七七七五、二十六音を基本とする、長い伝統をもつこの詩型を、今日に生きる庶民詩として

あらためて見なおしていただきたいということである。

思えばいままで、私はずいぶん無理をして高価な都々逸本を買い集めたが、そのほとんどは「よせ集め詞句集」である。また先人のどどいつ研究のすぐれた論文を載せた諸書の題名は「小唄何々」であったり「軟文学考」などであって、本の背に大きな字で「都々逸」または「都々一」と書かれたのは、昭和四十二年の杉原残華氏の『都々逸読本』と同五十四年高橋武子女史の『都々一坊扇歌の生涯』ぐらいのものではあるまいか。たとえ未熟であろうが不備であろうが、「どどいつ」の題名をかかげたこの本が書店に並ぶことに、私は無量の感を禁じ得ないのである。

本書が世に出る機会を与えられ、ご協力いただいた方々に心からお礼を申し上げたい。なかにも私ごとき者の志をあわれんで、ご所蔵の資料を惜しみなく貸与され、ご自筆の詳細なメモまでお送りいただいた「やよい吟社」主宰村瀬君蝶師にはお礼の言葉を知らない。この大先輩のご教示とお励ましがなかったら、私がこの著書にとりくむ勇気は出なかったであろう。

どどいつ作品を転載させていただくことについて、ご連絡先不明その他でごあいさつの行きとどかなかった方々には切にご協力のお許しを賜りたく、またこの道にご造詣の深い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

方々のご教示をあわせてお願い申し上げる次第である。

＊

なお、本書中の古典都々逸をはじめその他の文章、書名などの引用にあたって、漢字かなづかいなどの表記は必ずしも原文のママでないものがあることをおことわりしたい。昔の都々逸本では「おもひのたけを」とあるのを「思いのたけを」としたり最初の紹介では『團團珍聞』と原典のままとしたのを、後の説明では「団々珍聞」としたなどである。

歴史的な文章詩句の原文のママと、現在常用の文字との両方を、読みやすさを願って時に応じ併用させていただいた。また本書では主として「二十六字詩・どどいつ」という表現を用いているが「二十六文字詩」でも「二十六文字歌」でもまったく同じなのは申すまでもなく、むしろ文字数にこだわらないで「二十六音詩(歌)」と言うほうがよいときもある。

詩、歌、句、詞などの混用もこの世界の現実の姿として不統一のお叱りがないようお願いしたい。

昭和六十一年六月

中道風迅洞

二十六字詩 どどいつ入門——目次

1章 現代どどいつ顔見世披露
どどいつは市民の本音の歌……21
2章 都々逸というものの性格
うたいものと詩句との混同……31
詩句の特定のむずかしさ……35
3章 都々逸ぶしの生いたち
〝都々逸ぶし〟の発祥は東海道宮の宿……41
へそいつはどいつじや　ドドイツドイドイ……45

囃し言葉から〝どどいつ〟と呼ばれる……49
思いきる瀬ときらぬ瀬と……53

4章　都々一坊扇歌について

三味線片手に謎を解き、〝即興詩〟を歌う……59
いまに伝わる扇歌作の〝歌詞〟は少ない……62
「とっちりとん」の曲調にのせた美声で人気を博す……65

5章　七七七五という歌型のながれ

民謡、歌謡曲の歌詞にいちばん多い〝七七七五〟……71
隆達小歌、弄斎（ろうさい）などにみられる七七七五のながれ……75
俚謡都々逸で忘れがたい湯朝竹山人……80

6章 私撰古典都々逸集
〝よみ人知らず〟が多い古典都々逸……87
心意気　恋ごころ　花鳥風月　土地有情　花柳情歌
未練　しゃれ・おどけ・ふざけ　破礼句（バレ）　雑
7章 文明開化と都々逸
漢語都々逸、漢詩入り都々逸の流行……113
アンコ入り「さわり都々逸」の伝統があった……118
開化風俗を歌い、英語、フランス語(?)を組み入れる……123
8章 自由民権と都々逸
自由民権を鼓吹した「よしや武士」……133
ほれる権利とつくす義務……136

9章　團珍都々逸から俚謡正調へ
創作どどいつの気運を高めた絵入り滑稽雑誌『團團珍聞』……145
鶯亭金升の『都々逸獨稽古』は都々逸歳時記……149
俚謡正調――室内情歌から創作二十六字詩への脱皮……152
10章　情歌から都々逸、そして街歌へ
『都新聞』をめぐる現代どどいつの先駆者たち……163
「街歌」――新時代の心を盛る新しい名称の提唱……169
11章　英仏に紹介されたどどいつ
小泉八雲の『佛の畠の落穂』と『影』……175
〝日本の韻律〟を愛したジョルジュ・ボノー……178
ポール・クローデルの詩集『DODOITZU』……182
その他の〝英訳どどいつ〟……186

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co